イブラヒム

十二月三日、サウジ内務省は、ムハヤ・コンパウンド爆破事件の主犯を逮捕したと発表した。主犯の氏名、経歴なども顔写真とともに詳細に公表した。その男は沙漠のサソリの幹部だった、ジェッダにある名門キング・アブドルアジズ大学出身で、オサマ・ビン・ラディンの後輩だった。成績は、相当優秀だったようだ。彼は、アフガンで旧ソ連軍と戦闘してから過激派に属し、チェチェンなどで聖戦の闘士として活躍した。沙漠のサソリには、このような経歴の人物が多い。

治安当局は、事件発生以来、聖地メッカ、メディナ、それからジェッダ、タイフなど各地で一斉手入れを行い二〇〇人近いテロ容疑者を逮捕するなど懸命に犯人の捜索を行っていたが、一一月末の手入れで爆破事件の主犯を捕らえたのだった。そして、その時、ロケット弾、手榴弾、爆弾、拳銃など大量の武器、それに現金およそ一〇万リヤル(三〇〇万円)を押収することに成功した。

慎太郎は、一一月二五日の自爆テロ阻止そして今回の一連の一斉捜査、容疑者逮捕で、サウジ治安当局の高い能力を改めて認めていた。しかし、サウジ主要都市から大量の逮捕者が出たということは、同時にテロの裾野が相当に広いことも意味しているわけで、警戒感も一層強めていた。慎太郎は、一段と気を引き締めて生活しなければいけないと心を新たにした。

十二月六日に、サウジ内務省は、最も危険性が高いと思われるテロリスト二六人を特定してその氏名、顔写真などを載せた最重要氏名手配者リストを公表した。そして治安部隊は一段と攻勢を強め、翌七日には、ムハヤ・コンパウンド爆破事件に関与したと思われるテロリスト二五人を逮捕した。続いて、八日には、六日に公表した最重要指名手配者リスト中の一人を射殺し、その他のテロリスト一人を逮捕した。

このように、緊迫した状況が続いてはいたが、慎太郎は、慎重に行動をしながら、それなりに生活を楽しみ始めていた。

慎太郎は、リヤド支店に行く度に、笑顔で迎えてくれるラミアに癒やされていた。根がひょうきんな慎太郎は、毎日、受付を通る度に何か冗談を言ってラミアを笑わせていた。

それは、慎太郎にしてみれば、自然な振る舞いだったが、いつしか、特別の感情が芽生えて行った。ラミアがもうすぐいなくなってしまうという気持ちが余計そうさせるのかもしれないが、慎太郎は、ラミアの美しさ可愛さのとりこになって行ったのだ。

慎太郎は、受付を通る度に握手をしていた。繰り返している内に、その柔らかな手が他人のもののようには思えなくなっていた。ラミアの笑顔が慎太郎の目に一段と鮮やかに焼き付いて行った。

ラミアの美しさは日本には比べるものが無いエキゾチックなものだった。可憐なのに悩ましいほどの色気があった。清純派なのにどこか欲望を掻き立てるところがあるというアラビアンナイトの世界から抜け出てきたような不思議な

存在だった。全てを包み込んでしまう、まるで観音さまのようなイメージもあった。

ラミアは優しい子だった。慎太郎が、ちょっとお腹が痛い、歯が痛いなどと言うと、自分のことのように心配してくれた。足らないものを買おうとするとどこで買ったら良いかなど真剣にアドバイスをしてくれた。

何度見ても、ラミアはハイファ・ワハビにそっくりだった。見るほどに、顔つき、体つきまでハイファ本人のように見えて来た。目は大きく眉毛は長く、目鼻立ちはくっきりとしていた。絶世の美人で、素晴らしいプロポーションのグラマーだった。

「ラミア、昨日、ファイサリア・モールにあるレバノン料理店で美味しいサムブーサ(アラブ風揚げ餃子)を貰ったよ。その店では、時々、シュワルマ(削り肉と野菜のアラブ風サンドイッチ)を買ったり、定食を買ったりしているんで、店員と顔なじみになってね。安いし、上手いし、時にはサービスしてくれるんで入りびたりになりそうだよ」

慎太郎は、今日は、受付を通る時、ラミアにそんな話をしてみた。

「ミスター・イケナミは、レバノン料理を食べるんですか」

と言って、ラミアは慎太郎が地場の料理を食べてくれているのを喜んでいた。

「あのモールのお店は私も良く買いに行きます。有名なんですよ。本店は高級レバノン料理店でモールのお店よりは料理の値段が高いんですが、いつも満員です。勿論、味は一番です。ミスター・イケナミはお店の名前を覚えていますか」

嬉しそうに慎太郎に聞いた。

「覚えていないね。僕には料理の名前も、店の名前も憶えるのは難しいよ。ようやく、アラビア語で注文できるようになったばかりだもん」

と言うと、ラミアは驚いたように、

「え〜、アラビア語で注文出来るようになったんですか。ところで、店の名前ですが、“ベルジュ・ハマーム”と言うんですよ。その意味は、“鳩の塔”ということです。良い名前でしょう」

「そう、そんな名前だったの。良い名前だね。勉強になったよ。あそこは、何でも本当に美味いね。ホンモス、ファトーシュ、タブーレ、ババガヌージュ、それにコブスもいつもサービスでくれるし・・・」

「ミスター・イケナミは、随分とレバノン料理の名前を憶えましたね。でも、それって前菜ばっかしですね。コブスはパンだし」

「いけねー、そうか、そうそう、そういえば、定食ではメインで魚も、ラム(子羊の肉)も、牛もあったね。でもカバブが美味いけどね」

ラミアは、慎太郎がレバノン料理について一生懸命に話すのを、笑顔で聞いていた。

慎太郎は、ファイサリア・レジデンスをたいそう気に入っていた。

ホテル、レジデンスともに一つずつ屋内プール、ジムを備えていた。いずれも一流ホテルにふさわしく豪華なものだった。プールの水温は一年中、三〇度程度に保たれていた。レジデンスのジムはそれほど広くはなかったが、利用者が少ないので、いつでも使える状態だった。

ジムのレセプショニストはトレーナーも兼ねたサウジ人だった。慎太郎は、ここでもこの若いスポーツウェアを着た若者とすぐに打ち解けた。

ジムではレジデンスの人間とほとんど顔を合わせることはなかったが、ある時、練習好きのインド人、イブラヒムと一緒になった。その精悍な褐色の肉体から、日頃のトレーニングぶりが十分窺えた。彼は、このジムはもちろん、二つのプール、それにちょっと離れてはいるがアル・コザマ・ホテルの野外プールも時折利用していると慎太郎に語った。

アル・コザマ・ホテルは、アル・ファイサリア・ホテルよ

りランクは落ちるが、アル・ファイサリア・ホテルとは姉妹ホテルで準一流というところだった。野外プールはこのアル・コザマにしかなかった。イブラヒムは、野外プールは屋内プールに比べると綺麗さ、豪華さで劣るが、開放的で清々しい気分を味わえるところが好きだと言っていた。

イブラヒムは同じインド人でも、超高級マンションであるファイサリア・レジデンスに住み、超高級自家用車・ＢＭＷ五五〇ｉを乗り回す、普通のインド人よりは桁違いに裕福な人間だった。慎太郎は、イブラヒムは恐らくインドにいても桁(けた)違いに裕福な生活を送る、階級が相当に上の人間なのだろうと想像していた。

話をするにつれ、イブラヒムが石油市場に詳しいことが分かって来た。慎太郎とは話があった。慎太郎は、気楽に石油市場について話が出来る人間に会うことが出来て嬉しかった。知らず知らずのうちにそのような人間に飢えていたのだろう。そして、暇さえあれば、イブラヒムと話すようになっ

た。イブラヒムも慎太郎のような人間を探していたようで話は尽きることがなかった。

この日も、慎太郎はレジデンスの屋内プールでイブラヒムとぱったり会った。慎太郎が、ひと泳ぎ終えて、プールサイドにあるジャグジーバスで体を休めていると、彼もそこにやってきた。このジャグジーバスは、半径三メートルほどの円形の小さなものだったが、いつも利用者が少ないから十分な大きさだった。今もプールには慎太郎とイブラヒムの二人しかいない。

ジャグジーバスの内部の壁面からは等間隔で六ヶ所ほどジェット水流が放出されていて、細かな泡がその流れに沿って流れていた。底からも大小の泡が放出されていた。また、水温は四〇度程度で、まるで温泉に入っているように心地良かった。壁面の中程には座るための段があり、慎太郎は心地良いジェット水流を受けながらそこに座っていた。

「やあ、シンタロウ、また会ったね。でも、ジャグジーに入

っているということはもう泳ぎ終わって、帰るところかな。僕は、今日、ちょっと仕事がたてこんで、来るのが少し遅くなっちゃってね。新年早々にインドからダス石油ガス大臣がやって来ることになったもんだから、なんだかんだで大変だった。彼は、親しい友人で公式スケジュールの合間に僕に会いたいというので、急いでスケジュール調整をしたところさ」

といつもの調子で、ごく自然に政府高官の名前を引き合いに出した。

慎太郎には次第にイブラヒムの全体像が見えてきた。慎太郎は、イブラヒムの職業を知らなかったが、仕事上の付き合いではないので、全く急がずにイブラヒムの方で言ってくるまで詳細を聞くことを控えていた。イブラムの方も慎太郎の職業には関心がないのか、彼の職業などを聞いてくることはなかった。

その点、同じレジデンスに住む米国人とは異なっていた。米国人は、大概、最初に名刺を出し、まず身分を明らかにし

た。このレジデンスの場合は、サウジと合弁で作った会社の社長もしくは経営者が多かった。レジデンスにはサウジ人も住んでいたが、彼等はロイヤルファミリーや、ショーラという日本でいうと国会に当たる議会の議員などだった。ショーラの議員も自分から進んで身分を明らかにした。

そんなこともありイブラヒムとは自然体でつきあえた。

「イブラヒム、それでは、少し一緒に泳ぐか」

と言って、慎太郎はジャグジーを出た。

「そうか、それは楽しみだ。また、競争が出来る」

とイブラヒムは嬉しそうに言った。

慎太郎は、自分では、結構早く泳げる方だと思っていたが、イブラヒムの泳ぎには全くかなわなかった。彼は、留学先のテキサス大学で競泳部に入っていたとかで、まるで水泳選手のように早かった。普通の人からすれば、飛び魚と泳いでいるようなものだった。五〇メートルだから良いようなものの、それ以上は全く勝負にならない。

少し泳いでから、二人は、ジャグジーに入った。

「シンタロウ、一緒に泳いでくれたお礼と言ってはなんだが、何も約束が入ってなければ、今晩この近くのインドレストランに招待したいのだが、どうだい」

とイブラヒムは気楽に誘ってきた。

慎太郎は、一瞬、急に人を誘うなど、ショートノーティス（急な案内）で遺憾だなどと昔の外交官の時のような反応が出そうになったのをぐっと抑えて、快く応じることにした。

「有難う。それではいつ、どこで会おうか」

と応えた。

「イシャーのサラート（一日の最後の夜のお祈り、午後七時頃から始まる）の後にレジデンスの受け付けで会おう。レストランへは僕の車で連れて行ってあげるよ」

とイブラヒムは嬉しそうに言った。

“シェラザード”というそのインドレストランにはすぐ着いた。

慎太郎も、“来々飯店”という中華レストランに行く時にその前を何度か通って高級インドレストランがあるなと気にしていたから、レジデンスからは大きな通りを一つ隔てただけのところにあることは分かっていた。

車で行くこともない距離なのだが、セキュリティ上は、この方が良かった。ファイサリア・コンプレックスなどがあるこのオレイヤ地区は、リヤドでも最も安全な高級商業・住宅地域だったから歩いても何の問題も無いと言われてはいたが、全くテロリストの襲撃がないとは言い切れないし、そもそも夜道を歩くというのは不安なことだった。

リヤドのレストランには男性用と家族用の二つの入口がある。もちろん、中もその二つに分かれている。公共の場では女性が夫以外の男性に顔を見せてはいけないという宗教上の戒律を実践するためのもので、家庭のパーティーでもそ

うだが女性が男性と混じって食事をすることは決してない。
イブラヒムと慎太郎が男性用の入口から入ると、インド人の支配人が飛んで出てきた。
「イブラヒム様、いつもご利用有難うございます。今日は何人様で・・・」
などと下にも置かぬもてなしだ。このレストランでは、イブラヒムは特別の存在に違いない。慎太郎は、イブラヒムがインド人社会でかなり有名なのだろうと思った。
レストランの内部は薄暗く、天井は、深い群青色にライトアップされていてまるで夜空のように美しかった。そして、そこには細かな電球が無数に付けられ星のようにきらきらと輝いていた。
ここは男性用の部屋だから、アベックで来ることは決してないので、こんなにロマンチックにすることはないのになどと考えながら、周囲を見ると、薄暗闇に慣れて来た目には、

大勢の客がいることが分かった。

インド人もいたが、サウジ人が圧倒的に多かった。中華レストランでは、中国人、韓国人などアジア系が多くアラブ系がいてもレバノン人など外国人が多かったのとは対照的だった。

サウジでは、男性同士で手を繋いで歩いているのを見かけることが多いが、ここにも手を繋いで入ってくる男性が多かった。男性同士が手を繋いでいるのを見慣れていない慎太郎には、それが怪しいもののように思えて仕方がなかった。

慎太郎は、ここは初めてだったし今日はゲストなので、料理の選択はイブラヒムに任せていた。イブラヒムが肉は何が良いかと聞いて来たので、ラム(子羊の肉)があれば、ラムが良いが鶏でも良いと応えた程度だった。慎太郎は、インドに出張したこともあり、本格的なインド料理にも慣れていた。好みの料理の一つだった。

「シンタロウ、インドにはカレーが二〇〇種類もあるんだ」
などと言いながら、イブラヒムはカレーも注文していた。
「二〇〇種類もあったら、毎日食べても全種類食べるには、七ヵ月間近くかかってしまうね」
と慎太郎がおどけて言うと、
「まあ、二〇〇種類というのはインド全土でということだから、一人の主婦が全部作れると言うわけではないよ」
と笑いながらイブラヒムが応えた。

サウジではアルコール飲料が全く飲めないので、慎太郎とイブラヒムはりんごジュースと炭酸水からつくる通称サウジ・シャンペンを注文した。シャンペンという名は奮っている。よほどアルコールの恋しい人が恋焦がれて付けたに違いない。アルコールの入っていないシャンペンなんてカレー粉の入っていないカレーみたいなもんで拍子抜けだなどと慎太郎は思っていたが、これは結構いけた。
少なくとも最初の乾杯には向いている。

オードブルが終り、メインの何種類かのカレーが出されると、イブラヒムは、カレーに入った芳醇な香りを放つラムを頬張りながら話し始めた。

「ところで、ここのところ、石油価格がまた上がり始めたね。長い間石油価格は安いものと見られてきて、皆も石油を見直し始めていたのにちょっと心配だね」

「そう、石油価格が一九八八年に市場で決定されるようになってからは、湾岸戦争の時などを除けば、大体、ＮＹＭＥＸ(ニューヨーク商業取引所)で取引される期近先物の米国産標準油種、これはＷＴＩ(ウェスト・テキサス・インターミディエイト、軽質原油)のことだけど、その価格がバレル(一バレルは一五九リットル)当り二〇ドル程度だったのに、ここのところ三〇ドル台が長い間続いているからね」

待っていましたとばかりに慎太郎は一気に喋った。いつも石油を売ったり買ったりしている慎太郎の頭の中には石油価格の値動きが全て記憶されていた。

「一時、三七ドル程度まで上昇した二〇〇〇年の高価格も二〇〇一年には収まったし、二〇〇三年のイラク戦争の直前には三八ドル弱まで上昇して湾岸戦争の時に記録した四〇ドル強に迫る勢いの時もあったけど、戦争があっという間に終わったから、すぐに二五ドル程度まで急落してしまった」

「これまでの高価格は長続きはしなかった」

と慎太郎は話を繋いだ。

「シンタロウは、これまでの原油価格の動きを良く知っているから、お陰で今の動きが良く理解出来て助かるよ。僕は、昔のことは感覚的にしか覚えていないから、シンタロウの言うように三〇ドル台が昔の二〇ドル台の一・五倍以上になっているという実感があまりないんだ。給料が一・五倍になっているわけではないだろうから、負担が一・五倍になっているわけだね」

と言うと、イブラヒムは、今度はライスを上手に手で摘み、それをチキンカレーに軽く浸けると、素早く口に運んだ。

「でも、君も知っているだろうけど、ガソリンとか軽油の値段には、原料の原油のコストだけではなく、タンカーで運ぶコスト、製油所で製品を生産するコスト、貯蔵コスト、流通コスト、それに税金などもあるから、原油コストが一・五倍になっても、すぐそのままガソリンや軽油の値段が一・五倍になるわけではないよ。また、君の国のように政府が価格をコントロールしている国では、そのまま消費者用の価格が上がるわけではないよね。まあ、長い間、政府が値上がり分を吸収するわけにはいかないだろうから、いずれは高くなるんだろうけど」

慎太郎は、そう説明すると、本場インドのカレーをスプーンで掬い一口啜った。好きな味だった。

「シンタロウ、僕は実はあまりそのような石油産業の内部の話は知らないんだ。勉強になるよ。僕は、もともとは金融関係で、たまたまここのところ原油の先物に関係してきただけだから・・・」、

「今度、インドからダス石油ガス相が来るけど、僕は政府関係の人間でもないので、本当に私的に会うだけなんだ。大臣は大変だと思うよ。石油は安い方が良いと思っているに違いないね。これからの経済成長にとってもそうだし、何よりも国民の生活に影響して来るからね。その点、君の国とは違うよ」

と言うと、イブラヒムは、また、ライスを上手に手で掴むと口に運んだ。

そして、続けた。

「インドは、安い石炭が豊富だけど、その使い道が限られているから、石油に頼ってゆくことになる。大臣は、価格もそうだけど、安定的に石油を供給してもらうようサウジに頼むことになるんだろうと思う。この国とどのような関係を築いて行くのか、大臣の責任は重いね」

慎太郎は、イブラヒムが石油先物に係わっていることを彼の口から聞いて始めて知った。慎太郎は、当然、この方面の知識はあったが、仕事で直接は係わっていなかったので深くは知らなかった。日本の石油業界だけではなくアジアの国々は概ねそうだったが、その供給の多くを産油国との長期契約に依存しているので、スポット市場はともかく、先物市場にはあまり関心は無かった。

日本でも、この方面は、石油会社というよりも、証券会社のような金融関係者の方が馴染みが深かった。日本の当業者(先物取引の専門用語、実業、現業からの市場参加者)は、危険を分散するためのヘッジングには関心があるが、基本的には、非当業者のような利益追求という観点からの市場参加を嫌うところがあった。

これに対し、欧米では当業者の中にも、BP(ブリティッシュ・ペトローリアム・ロンドンに本社を置くスーパーメジャーの一つ)のようにヘッジングだけではなく、利益を追求して先物市場に積極的に参加するものもあった。より規模の

小さいスポット市場では、市場操作をして不当な利益を得たものもあったくらいだ。

「イブラヒムは、先物に係わっていると言ったけど、聞いた時に正直驚いたね。これまで、そんなインド人とは会ったことがなかったからね。結構、儲かっているのかい」

と言いながら、慎太郎は、好物のガーリック・ナンをちぎって食べた。

「僕は、個人で先物取引をしているわけではないんだ。知り合いのサウジ人の金持ちが依頼して来てね。僕の金融関係の専門知識を生かして協力しているだけなんだ。だから、僕の儲けは大したことはない。儲かる時もあれば、損をする時もあるというところだね。と言っても儲けてあげないとサウジ人から見放されてしまうから大変だ」、

「クライアント(顧客)のサウジ人は、皆大金持ちなのだが、金持ちほど貪欲なものさ。平均して一五％を超える利益を上げないと評価してくれない。それ以下なら、定期預金や先進

国の国債で十分というわけさ。昔のように米国の財務省証券が相当の利益率だった時は良かったが、今や、リスクを伴うものに投資して大きな儲けを狙わなければならなくなっているんだ。安全で利益の大きいものはないね。それで、僕のような専門家のアドバイスが必要になるというわけだ。僕は、サウジだけだけど、クウェートなんかは随分と前から欧米を中心としたその方面の専門家のアドバイスを受けているし、そちらの方の利益は相当なものなんじゃないかな」、

「それに、僕はテキサスに留学したことがあるんだが、その時の知り合いが石油関係だったことも石油に興味を示すきっかけになったね」

慎太郎は、儲かっているものは儲かっているなどとは言わないものと十分に承知して質問をしたので、とうとうと喋り出したイブラヒムから具体的な数字が出るとは思っていなかった。そうか、彼は、石油を単なる商品先物として扱う新人類だったのかと偶然そのような希少な人物と知り合えた幸運を感じながらイブラヒムの話を聞いていた。

「シンタロウは、石油価格が一九八八年に市場で決定されるようになってから後は、湾岸戦争の時を除けば大体二〇ドルだったと言ったが、サウジにしてみれば、この時は、辛い時だったたろうね。湾岸戦争での出費も大きかっただろうし、その後は、その時の借金返済などもあり、お先真っ暗だったんじゃないかな。急増する人口、大量の失業者など経済運営は難しかったろうと思う。それを考えると、今は上昇加減でホッとしているんじゃないかな」

とイブラヒムは、話をそらした。

それを受けて慎太郎は、それならばそれと話題を直ぐにそちらに移した。

「そうだね。サウジの人口は今二三〇〇万人は超えているんじゃないかな。一九九二年には一七〇〇万人弱だったからね。サウジの輸出収入は一九九二年には五〇〇億ドルを超えたんだけど、その後は低迷して一九九八年には四〇〇億ドルを切ってしまった。しかし、その間も人口は増え続けて一九九

八年には一九〇〇万人を超えた。その時は、サウジも大変だったろうと思う。それが、あの九・一一のテロリストを生む背景になったと指摘する人もいるくらいだ。イブラヒムも知っていると思うけど、九・一一のテロリスト一九人の内の一五人がサウジ人で、しかも、この一五人の内の一三人が、アル・ババハ、アシールなど西南部出身だった。リヤドのあるナジド、ジェッダという大都会とこれらの地方との間の経済格差は大きい。経済の低迷、失業の発生などは、これら弱いところに大きく影響が出ることになったんだ」、

「しかし、これらの地域は、かつて、お隣のイエメンと一緒にアラビア・フェリックス(幸せなアラビア)と言われ、緑豊かで、経済的にも豊かだった。歴史、文化的にもこのナジドより格段上だった。それが、アブドルアジズによるサウジ統一、膨大な石油収入により大きく変わった。その後はナジドがアラビア・フェリックスとなり、これらの地方の政治、経済は相対的に落ち込んだ。そして部族の中には中央に対して反感を抱くものも出た」、

「ビン・ラディンは、それを良く知っていて巧みに利用した

と言われている。まあ、でもテロリストになるのはごく一部だが、皮肉なことに、彼等には問題意識のある優秀な人間が多いらしい」

そう言いながら慎太郎は、同じアブハ出身のオスマを頭に思い描き、とても優秀とは思えない彼が決してテロリストになるようなことはないだろうと思っていた。

やがて、出会うことになるカリムがそのアブハで“砂漠のさそり”のために立ち上がったことなど知る由もなかった。